

6

鳥を調べる

1. 鳥類の観察

植物や昆虫と違って、鳥類は採集することができませんので、調査の方法は観察が基本となります。野生の鳥類は人が近づくと逃げるのが普通ですので、観察には遠くからでも、その姿を捉えることのできる双眼鏡や望遠鏡が必須の道具となります。双眼鏡は7~9倍で、対物レンズの直径が35mm程度のものが、重量・視野の広



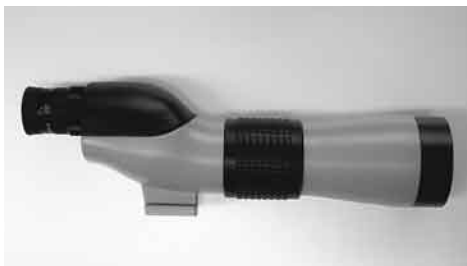
さからしてもっとも使いやすく、望遠鏡は25倍程度のもので使われるのが、普通です。

双眼鏡や望遠鏡を使うからといって、これらが鳥類の発見に役立つのはかなり上級者になってからで、肉眼でまず探するのが基本で

す。森林の小鳥などの場合は、じっとしているときはなかなか見つけることはむずかしく、飛んだ時や、動いているときに見つけるのがコツです。また、森林では、姿が樹木の枝や葉っぱに隠れていることが多いので、鳴き声を頼りにおおよその位置を推測し、そのあたりをじっと見つめていると動いている姿が肉眼で捉えられるというパターンが普通です。鳴き声を頼りに鳥を探すのですから、森のなかを歩くときには、足音をできるだけ立てないこと、おしゃべりをしないことが基本になります。足音を立てないコツはまず、靴選び、特別な靴でなくてもやわらかい運動靴があれば十分です。次に歩き方ですが、かかとを先に地面につけてゆっくりと足先をおろしていくと、カサコソという音は消せます。

鳥の声がきこえたら、立ち止まって、声の方向をじっと見つめます。この時はがまんが肝心です。鳥の方も警戒していますので、少しでも音を立てると、あっという間に逃げられてしまいます。かす

かにでも動きを感じたら、その場所を肉眼で直視し、そのまま頭を動かさず、首にかけた双眼鏡を目にあてましょう。その中に、鳥の動きが見えたらしめたもの。後は、鳥の動きにあわせて双眼鏡を動かすだけで、鳥の姿を十分観察できるはずです。



河川や池などの開けた場所で、カモ類のような大型～中型の水鳥を観察する場合は、森の場合とずいぶん状況が異なります。鳥との距離が遠い限り、鳥は逃げませんが、距離があるだけに、双眼鏡だけでは事足りません。この場合には、まずは、森の場合と同じように、肉眼で鳥をみつめ、頭を動かすことなく、双眼鏡をそっと目にあてましょう。すると、大きな鳥の場合は双眼鏡だけでも十分観察できます。中型以下の鳥の場合には、いよいよ望遠鏡の登場です。

望遠鏡の使い方にはちょっと熟練が必要です。まずは肉眼もしくは双眼鏡で鳥の位置を確認します。この時、鳥のそばになにか目印（たとえば、池の中の杭や背景の建物）を発見しておいて、その目印を頼りに鳥を望遠鏡のなかに入れるようにするとよいでしょう。水鳥の場合は、森の中の小鳥のように、せかせかと動き回ることがないので、いったん望遠鏡のなかに入れてしまえば、じっくりと鳥を観察することができます。

2. 鳥類の識別

植物や昆虫と違って、鳥は日本で記録されたことのある種が500種程度、めったに見る事のない少数種をのぞくと、せいぜい300種、身近な鳥となると100種程度になりますので、観察することさえできれば、種の識別は比較的容易です。ただし、漠然と鳥を見ている

だけでは、識別はできません。識別のポイントがどの種にも存在します。また、身近な鳥を最初に識別できるようになると、それらとどこが違うのかということに頼りに多くの種が識別できるようになります。また、大きさの判断も鳥の識別には大切なポイントです。双眼鏡や望遠鏡でみていると、どうしても大きく見えてしまうので、これには慣れが必要です。初心者は、身近な鳥では小さいほうから、スズメ・ヒヨドリ・ハト・カラスの大きさを知る努力をするのがもっともてっとり早いでしょう。これがわかるようになると、たとえば、シジュウカラはスズメと同じかちょっと小さい、ツグミやムクドリはヒヨドリのサイズ、カモの多くはハトサイズといったことがわかるようになります。

さて、識別のポイントですが、小型のハンドブックや図鑑には、識別のポイントが簡潔に記載されているものがあります。重い図鑑を持ち歩くより、こういった小型で軽量のハンドブックを持ち歩くのがお勧めです。こういったものには、ある種は翼のどこかに白い斑点があるとか、飛んだときに尾羽の外側に白い羽根が見えるとかいった、わかりやすいポイントが書かれています。

また、識別力をあげるには、他人に頼らず、自分で一所懸命に鳥をみて、識別ポイントを探し出す努力が欠かせません。上級者につまでもつきまどってはい、いつまでたっても腕はあがりません。自分で模索する努力がもっとも重要といえます。自分で種を識別できたときの喜びは大きいもので、その識別ポイントは生涯忘れることがありません。

森の鳥の場合、鳴き声で識別することも中級者以上では必要です。近畿地方の森は藪が多く、声が聞こえても結局姿を探し当てられないことが、上級者でも結構あるものです。鳴き声でよく知られているのは、繁殖期のオスのさえずりです。たとえば、ウグイスの「ホーホケキョ」はよく知られた例ですが、さえずりは繁殖期に限って、オスがなわばり宣言のため、そしてメスを誘引するためにもちいるので、さえずりだけを知っていても、野外での識別には不十分です。



また、さえずりの識別も、ウグイスのような容易なもの稀といいいでしょう。

さえずり以外の鳴き声は「地鳴き」と総称しています。ウグイスの場合は、冬の間「チャッ、チャッ」という地味な声で生垣の間を忙しそうに動き回っています。たいていの鳥は何種類かの地鳴きをもっていますので、これらの多様な鳴き声と鳥の種をむすびつけるにはかなりの努力が

要ります。しかし、その技術は先に述べた、ひたすら鳥をみつける努力をし、みつけたら執拗に追い続けるという行為の繰り返しのなかから得ることができます。森のなかで、正体不明の鳴き声を聞きつけ、執拗に探した結果、それが自分がすでに知っていた鳥のものであったときの喜びは大きなもので、これも生涯忘れることのない記憶として残ります。

まとめると、鳥の識別力を高める方法は唯一で、自分ひとりの力で鳥を探し、執拗に観察すること、そしてハンドブックと相談することです。

3. 鳥類の調査

鳥の調査には、さまざまなものがありますが、大別すると、十分な識別能力をもった上級者が行なう群集調査と対象となる種が識別できたら可能な単一種を対象とする調査に分けられます。群集調査はある地域にどんな種がどれだけいるのかを調査するもので、普通はルートセンサスといって決まったルートを決まった時間内で歩き、その間に出現した鳥をすべて記録する方法がとられます。季節ごとにこの調査を行なうと、年間を通して、ある地域の鳥類群集が

どう変化するのか、あるいは他の地域と比較して、当該地域の特徴がわかることになります。単一（もしくは少数）の種を対象とする調査には目的別にさまざまな調査が考えられますが、ここでは、初心者にも比較的簡単にできる集団繁殖地（コロニー）や集団ねぐらの調査方法を紹介しておきましょう。

集団で繁殖したり、ねぐらをとったりする代表的な鳥はサギ類やカワウ、それにカラス類です。サギ類のなかにはチュウサギのように近年減少が著しい種がいる一方、カワウやカラス類は増加して困っている種です。

コロニーやねぐらの調査に必要な要件は、まずは種をある程度ま



で（最低限サギ類である、カラス類であることがわかること）識別できることと、調査者の集団が必要だということです。これらのコロニーやねぐらは広い地域のなかにポツリポツリと点在しているものですから、一

人の人間では調査できません。多くの仲間がいて、多くの目があれば、通勤・通学の途中にコロニーやねぐらが目にとまることが必ずあります。仲間で情報を共有しあって、地図の上にコロニーやねぐらの候補地をプロットし、それらが出揃った段階で双眼鏡・望遠鏡を携えて候補地に確かめに行けばよいのです。あとは、定期的に（たとえば毎週1回とか）手分けして、発見したコロニー・ねぐらに通い、おおざっぱな鳥の数をかぞえて記録しておけば、1年たったとき、当該地域にたとえば、カワウのねぐらがいくつあって、何月から何月まで、個々のコロニーが存在し、その大きさ（鳥の数）がどう変化したかが結果として明らかになります。

この時、重要なことがひとつあります。それは、コロニーやねぐらがなくなったとき、なくなったことを示すデータ（鳥がいないと



いうデータ)をとっておくことです。鳥の観察者は鳥のいるところには見に行くけれど、いないところには行かない傾向があります。これは心情的には当然のことなのですが、ことが調査になるとそうはいきません。いないということを確認することが調査では必要なのです。

先に触れたように、近年減少している鳥と逆に増えている鳥がいます。ねぐら調査やコロニー調査によって、このことは比較的簡単にモニターすることができます。

